

森三千代の「病薔薇」における日中女性同士の繋がり —「自由」・「愛」・「夢」のために

The relationship between fellow Japanese and Chinese women in Michiyo Mori's

Byōsōbi: For “freedom”, “love” and “dream”

楊 佳嘉

YANG Jiajia

摘要

This paper focuses on multiple perspectives in *Byōsōbi*, Michiyo Mori's self-representation novel, and discusses the three scenes where Japanese and Chinese women writers face each other. After clarifying how the three encounters are narrated, how the images of others and the self-image in the novel are constructed in an interlocking system, it analyses the meaning that is attributed by Michiyo Mori to the deviations between events in reality and fiction. In addition, we explore the multilayered nature and complexity of the meaning of the act of writing the other's image which is linked to the generation of self-image, and try to reevaluate the female author Michiyo Mori and Wei Bai.

キーワード：森三千代 「病薔薇」 日中交流 女性作家 自己表象

Keywords: Michiyo Mori, *Byōsōbi*, Woman writer, self-representation

はじめに

一九二〇年代の日本と中国の間における文化的な交流については、かなりの研究蓄積がある。特に、上海というトポスにおいて、多くの日中男性知識人が交流していたことが明らかにされてきたが、女性知識人の間の交流はほとんど語られていない⁽¹⁾。男性知識人の間の交流と比べてみると、女性知識人同士の交流はわずかでありながらも、ないわけではない。森三千代はその一人である。

森三千代は詩人金子光晴の妻として知られており、作家としてはあまり評価されていない。生涯三回中国へ渡り、東南アジア、ヨーロッパを中心として四年間の放浪の旅を経験した彼女は、その経験をもとに、多くの作品を創作した⁽²⁾。そのうち、森三千代の上海経験と上海関連小説については、近年、研究が開始されている。趙怡は森三千代の上海関係の短編小説を紹介した後、森三千代の「髑髏杯」と金子光晴の「どくろ杯」の繋がり注目し、森三千代の上海小説が光晴の『どくろ杯』の下地となっていることを論じたうえで、「春灯」シリーズ⁽³⁾の作品における日本人女性（朋子/友子）像を分析し、その紋切り型を逸脱する特徴と上海日本人社会の一側面を論じた⁽⁴⁾。宮内淳子は上海体験をもとに森三千代が小説に描いたモダンガールに着目し、彼女たちの装いについての描写を中心に、異国の衣服に対する欲望、装いを変えることを望みながらも、うまく着こなせていないという点を分析し、作家としての森三千代の越境の心境と挫折を読み取った⁽⁵⁾。以上のような研究があるとは言え、個々の作品についての詳しい

考察はほとんど展開されていない。金子光晴に対する研究が膨大であるのと対照的に、森三千代とその文学についての研究はまだ不十分と言わざるを得ない。

森三千代の上海関連小説群の中で、中国の女性作家白薇⁽⁶⁾との交流を素材にして創作した作品として「病薔薇」がある。「病薔薇」は森三千代が1946年10月『桃源』⁽⁷⁾の創刊号に発表した短編小説である。主人公である桂龍子一人でパリへ行く途中に、上海で一冬を過ごす。その間女子高等師範学校の級友である中国人女性作家の朱薔薇と再会して、三回の交流を持つという。日中の女性作家の交流を物語る作品である。森三千代の「病薔薇」を発見し、その作品と森三千代の上海体験の関係について論じたのは趙論のみである。趙は「森三千代の上海：金子光晴と放浪の旅へ」において、現実の森三千代と白薇が確かに会って交流したことを検証し得る資料⁽⁸⁾を示し、「病薔薇」を通して森三千代と白薇の交流の様子を検証したのみならず、日中両国当事者の証言を踏まえ、森三千代と魯迅の交友や、森三千代の視点から金子光晴夫婦の上海生活の実態も明らかにし、上海生活が森三千代の人生及び創作に与えた影響を論じた⁽⁹⁾。うえで、「病薔薇」を森三千代の一連の上海関連小説の中でも、「自伝色の濃い作品」⁽¹⁰⁾と位置づけた。森三千代と白薇という日中女性同士の交友関係の確認および小説「病薔薇」の発見について、趙の仕事は非常に重要でかつ大きい意義がある。しかし、小説の内容を通して、当時の森三千代と白薇の交流の姿を読み取ることに對して、筆者は疑問を持っている。小説はあくまでもフィクションであり、実在のモデルが存在しても、フィクションの内容そのままを現実の人物に当て嵌めることはできない。趙は小説の内容と現実とずれがあることを知っていた⁽¹¹⁾にもかかわらず、森三千代と白薇との交友の姿を検証する際、小説の内容における現実と重なった部分と現実を離れた部分（あるいは現実が本当に小説通りなのかどうか、確認できない部分）とを厳密に区分けしなかった。しかも、小説として虚構された構造、登場人物の薔薇像と龍子像の変化などについて、彼女は関心を示していない。

本論は、「病薔薇」を現実の森三千代と白薇との交流の事実を検証する資料として読むのではなく、それを森三千代の〈自己表象テクスト〉⁽¹²⁾として取り上げ、他者と自己認識の関係性という問題をめぐって読み直す。まず、作品における複数の視点の取り込みに注目し、日中女性同士が対面する三か所の場面を中心に、その三回の出会いがどのように語られたのか、他者像と自画像がどのように変化し、いかに連動して構築されたのかを明らかにする。そのうえで、1920年代末日中女性作家の出会いが小説の中でどのように描かれ、現実とフィクションの中の出来事のずれに、作者がどのような意味を付与したのかを検討する。この作品の分析を通して、女性作家の自己表象という行為のジェンダー構造に留意しつつ、日中の関係性を解明することによって、東アジアの近代化の文脈における、女性の交流とその意味を検討したい。

一、森三千代の第二次上海滞在と「病薔薇」 — 現実とフィクションの交錯

森三千代は生涯で二度上海に滞在している。一回目は金子光晴との新婚旅行で、1926年3月から4月までである。二回目は、1928年であり、金子光晴が生活苦と森三千代の不倫の問題⁽¹³⁾を打開することを望み、夫婦二人でヨーロッパへの旅の始めに長崎を経て、11月に上海に到着した。森三千代は1928年11月～1929年5月まで上海に滞在し、その間に中国の女性作家白薇と会った⁽¹⁴⁾。

ここでは、まず小説の内容からその時代背景を再確認しておく。

一つの劇場には、屋根の上にだしものの標題が、でかでかとかきたてゝあった。陸根栄という人力車夫が、黄慧如という令嬢と恋に落ち、全中国の民衆の支持と同情をかった新聞記事を、劇や映画にして人気をさらいつづけているのであった。(p.90)

1928年6月から1929年3月の間に、上海で起った陸根栄、黄慧如の駆け落ち事件は中国全国で大きく注目されており、新聞、芝居、映画界で話題になった⁽¹⁵⁾。その事件を題材とした映画が計画されたのは1928年11月初めの頃であった。当時、上海影劇会社の経営者である顧無為と女優の林如心は妊娠中の黄慧如を訪問し、彼女に主役での出演を依頼したという⁽¹⁶⁾。したがって、小説テキスト内の年代は1928年後半から1929年前半までだと推測でき、ちょうど森三千代の第二次上海滞在時期と重なっていることがわかる。

次に、あらためて小説に登場した人物のモデルを確認しておきたい。小説に登場した中国の女性作家朱薔薇は「中国女流文壇の鏘々であった」と描かれていた。1928年前後の中国において、多くの女性作家⁽¹⁷⁾たちがすでに文壇で活躍していたが、その時「明星」のように現れ輝いていたのは白薇とすることができる。1926年、白薇は「琳麗」という作品によって、「新文壇の明星」⁽¹⁸⁾として名前が知られるようになり、1929年1月の『真美善』（女性作家特集）で編集長の張若谷に「白薇は希望のある一人である。彼女の「琳麗」は中国詩劇界における唯一の大作である！」⁽¹⁹⁾と評価されているように、中国の文壇で脚光を浴びていた。また、金子光晴の「郁達夫と魯迅」には、当時、金子と森が中国の文人郁達夫に案内され、上海に住んでいた白薇宅を訪問したことが記されており、小説における郭という男のモデルは郁達夫だと考えられる⁽²⁰⁾。さらに、森三千代と黄白薇姉妹との食事会⁽²¹⁾と小説における桂龍子と朱薔薇姉妹との食事会を対照してみると、類似点があり、桂龍子のモデルが森三千代自身であることも確認できる。よって、この作品は森三千代の＜自己表象テキスト＞として読むことができるだろう。

だが、フィクションの内容に現実の記録と交錯したところがあるにもかかわらず、現実とは異なったところも少なくなく、それを見逃すわけにはいかない。たとえば、金子光晴と森三千代は二人で一緒に上海で白薇を訪問したが、フィクションの中では、桂龍子は一人で上海に滞在しており、しかも結婚しているかどうか不明である。つまり、金子光晴の影はこの作品の中では、完全に消えている。また、小説における朱薔薇の造形は現実の白薇といくつかのずれがある。次に、このような現実と小説の間のずれに注意しつつ、小説の内容を分析していく。

二、二重化した郭周夫の視線 — 薔薇の身体表象を中心に

第一回の対面をした時、龍子は郭の案内で薔薇の部屋を訪れ、五年ぶりに薔薇と再会する。最初に龍子を驚かせたのは薔薇の「見定めること」ができないほどの暗い顔との身体の変化であった。龍子に焦点化した語り手の視線によって、その顔に現れた「蠟のように底冷たく澄んだ病みやつれ」た表情に薔薇の五年間の生活の苦難が、汲み取られる。そのみならず、「腰が折れたまゝで、上半身をまっすぐにすることができなかつた」様子とあり、朱薔薇は弱々しく、病んだ身体で登場している。龍子は薔薇の病気に心配を示すが、薔薇は自分の病気を深く気にすることもなく、「なげやり」な態度で、病気が治ったら龍子のところへ遊びに行くと言う。薔薇の病気について興味深いのは、郭と龍子の認識に差異があることである。対面の直後の郭と

龍子の対話を分析する。

「薔薇女士の病気、わかりましたか。」「胸でしょうか。」郭は、だまって、にやにやしていた。「腰。」郭は手をたゝいて大笑いした。「薔薇女士の病気はね。つまり、あんまり人を愛しすぎる病気ですよ。」「朱薔薇さんは、なにかお気の毒なことでもあったのではありませんの？」しばらくしてから龍子はたずねた。「お気の毒？」^{ママ}気の毒ではありませんよ。あの人はいつでも自由です。自由すぎて、それで病気になったのです。」(pp.89-90)

郭の発言では、朱薔薇がかかった病気は性病であることが仄めかされている。その上、病気にかかった薔薇の生活の苦難に同情と心配を示した龍子と違い、郭は薔薇の病気を「あんまり人を愛すぎる」病気だと解釈し、病気の原因を「自由すぎ」るためと帰結し、「大笑い」している。

周知のように、文学史における性病は特殊なメタファーとして認識されている。たとえば、梅毒は悪の隠喩としてもっとも多用された病気のひとつであり、その病気に言及する際、患者の品格や素行の悪さに原因を見、自業自得のような評価に関連づけられる⁽²²⁾。また、性行為による感染の可能性のある梅毒には、「汚染」という意味も付され、乱交や売春といった逸脱した性行為と結びつけられることもしばしばある⁽²³⁾。郭がいった「自由すぎ」というのは、性的放縦であることを暗に示していると考えられる。つまり、自由すぎ（性的放縦）であることの結果として、病気（性病）という罰が当たえられたのだ。「にやにや」した顔つきと「手をたたいて大笑いした」しぐさからは薔薇の「自由」と「病気」に対する、郭のネガティブな評価が読み取れる。郭の視線によって見られる薔薇は「性的にみだれた悪女」として意味づけられているのである。

性病を持つ男性より性病を持つ女性は人々の注目の的になりやすく、しばしば「娼婦」や「悪女」などのレッテルが付され、男性より厳しい批判を浴びていた。モデルとなった白薇に目を向ければ、彼女自身の生活と彼女についての評価がまさにその一つの例と言える。1928年、白薇はシンガポールから戻ってきた恋人である楊騷に淋病をうつされた。性病の苦痛に悩まされたのみならず、彼女の病気とその病気をめぐる私生活が世間の注目を集め、白薇を悩ませた。同時代の中国の新聞記事は、白薇がかかった病気を「風流病」⁽²⁴⁾、「第三種類の病気」⁽²⁵⁾、などとして揶揄した。「黄白薇と楊騷は夫婦作家なのか」⁽²⁶⁾などという、二人の間のプライベートな生活についての話題が人々の「笑いの種となり、文壇においてもこっそり議論された」⁽²⁷⁾。「二人は同居していた。あの二人の関係はとても不思議だった」⁽²⁸⁾など暴露的な記事も散見できる。中国だけでなく、日本においても同じような評価がなされている。中国文学者である奥野信太郎は1939年7月の『新女苑』の中で、近代中国女性の苦悩について紹介する際、白薇を次のように評価した。

この冰心と対蹠的な存在といえ、白薇女士のことが思い浮かぶ。その品の悪さ、その経てきた荆棘の路、すべてが冰心のそれとは似ても似つかぬものである。(中略)この二十年間に冰心の歩んだ路を選んで今では堅実な家庭の妻となっている多くの姑娘があつた一方、白薇の歩んだ路を選んであらゆる危険に曝された女性もまた少くなくあつたであろうからこれもまた一つの型の代表といわなければならない⁽²⁹⁾。

1920年代の中国の女性作家たちの中でも、デビューの早かった冰心は「堅実な家庭の妻」の道を選び、新たな良妻賢母の模範として高い評価を受けた作家である。それに対して、異なった道を選ぶ白薇は「品の悪さ」、「危険に曝された女性」として位置づけられ、「悪女」のレッテルを張り付けられた。当時の女性作家白薇は性的存在として消費され、彼女についての評価ももっぱら性という点に集約されている。その点について、David Der-wei Wang は、革命と恋愛という二つのテーマが流行していた1920年代の後半、性病が白薇の革命運動の悪果として認識され、彼女を異性愛制度上の弱い位置に追いやったと指摘している⁽³⁰⁾。David Der-wei Wang は革命者としての白薇にのみに注目しており、女性作家としての白薇がいかにジェンダー化されたのかという点については論じていないが、以上の分析によって、罰としての性病は文壇においても、白薇を周縁に位置づけたのである。

まとめると、ここには二つの視線があるといえる。一つは、龍子に焦点化した視線である。薔薇の五年間の生活の辛さをうかがわせる弱々しい身体が描かれている。それに対して、郭の視線によって見られる薔薇は病んだ身体のみならず、「性的にみだれた悪女」という、ネガティブな評価が植え付けられている。しかも、その郭の視線はテキストの外部で同時代の白薇に向けられた視線と接続している。外部の視線が郭を通して小説の中に組み込まれているともいえる。語り手に近い視線（龍子に焦点化した視線）とは別に、郭の語りが差し挟まれているのであり、視線が二重化しているといえる。

三、桂龍子の視線 — 他者との交渉

郭の視線ではなく、桂龍子の視線に注目すると、さらに異なる薔薇像が浮かんでくる。先述したように、第一回の対面の場面では、龍子はわずか五年の間に大きく変わり病に侵された薔薇の体に弱々しさを見、驚くと同時に、彼女の生活の苦難と病気に同情の気持ちを示した。だが、対面の後、龍子が一人になる場面になると、より複雑な気持ちが生じている。この部分では、龍子の視線を通した薔薇像が、病とは異なる文脈で描かれている。

今日一日あまりたくさんのことに出合ったゝめに疲れている筈なのに、彼女は反対に意識が冴えかえって、鎮めるのが苦しいぐらいであった。中国の文壇に朱薔薇のかち得た地位で、日本の文壇ではまだかけ出しとまでもゆかない龍子は刺激されて、いったんすてたつもりの文学的野心と空費している時間へのあせりとで、身のおきどころもなくしているのであった。(p.91)

龍子が注目したのは薔薇の病んだ身体ではなく、彼女の文壇における地位である。そのような成功した中国女性作家に対して、龍子は自分自身を失敗した「身のおきどころ」もない日本女性作家として描く。ここでは、他者への視線を通した龍子の自己認識が形成されている。他国の女性作家への羨望と自分への失望に満ちた複雑さが読み取り得る。

「書く女性」、有名な作家になることを欲望する龍子を、森三千代の自己表象として位置付けてみたい。このような「書く女性」は「病薔薇」以外の作品でも描かれている。たとえば、「青春の放浪」(1951)では、一人称の語りで「書く私」が表象されている。共通しているのは、「病

薔薇の」龍子像も、「青春の放浪」の「書く私」も、ともに失敗した「書けない」女性として造形されていることである。

私は子供を育てながらの生活で、ろくろく机の前に坐っているひまがないので、小さな黒板を買ってきて、縁の柱にぶらさげて、おもりをしながら、思いついた詩の一行二行を書くことにしていた。貧乏も、しごとの報いられないことも辛抱できても、その辛抱が無駄だということは耐えられないことだ。私は出口のないところへとじこめられている。そして、私一人だけがとり残されてしまう。金がないので、雑誌も、本もよまない。はじめのうちは新聞もなかった。金子は私の焦燥と饑渴を気にしながらも、処置がないらしかった⁽³¹⁾。

第二次上海滞在の時期に、森三千代はすでに詩集『龍女の眸』（紅玉堂、1927）、『ムキシュキン公爵と雀』（1929）⁽³²⁾などの詩集を出版していた。また、「病薔薇」と「青春の放浪」が発表された1940、1950年代は、ちょうど森三千代創作の全盛期であり、彼女はすでに文壇において知られた存在となっている。しかしながら事後的に自己の経験を語る作品を発表した時、森三千代は「書けない自分」を描いている。その行為は、何を示しているのか。

飯田祐子は、男性作家に比較して「書く自己」を描く女性作家は少ないと指摘しつつ、その少ない「書く欲望」や「書く行為」を語る女性作家たちの作品を拾い上げ、男性作家たちのような「自己生成小説」が成功しないという、「文学場におけるマイノリティである」女性作家の書く行為をめぐる一つの傾向を示した。その傾向には男性達と違い「時間と精神を散漫化させる生活への恨み」があるという⁽³³⁾。「病薔薇」に戻れば、書く女性という森三千代の自己表象では、他国の女性作家像と照らし合わせることによって書く自分自身を問い直しているものの、やはり自己生成にはなっていない。

ただし、「病薔薇」における他者像を通した自画像の生成と連動への動きには、続きがある。次に、第二回の対面について考えたい。

二回目の対面場面では、薔薇が病院帰りのついでに、楊という青年の助けを得て龍子を訪ねている。楊の発話は描かれておらず、薔薇を助け、支える補助役としてのみ描かれており、ほとんど存在感がない。薔薇の病気はまだ治っておらず、龍子と少し昔話をただけで、疲れを見せている。

第二の対面ではどのような薔薇像が造形されたのか。薔薇の発話について分析していく。

「私広東にいました。広東に大きな騒動があったのを、あなた知ってますか。多勢の人が殺されました。学生も、女もその死骸の上を靴で踏んで、あちらこちら、逃げ歩きました。私は殺されるころでした。その時、楊さんがいてくれました。私を背負って、ひどい苦勞をして逃げてくれました。その時の話は、話しても話しても尽きないくらいたくさんあります。」そう言って、彼女は、下から楊の、削り取ったような暗いかげのある、やせた頬を、じっと見上げた。(p.92)

薔薇が言った広東の大きな騒動とは1920年代の後半に起きた中国国民大革命だと推定できる⁽³⁴⁾。このような国民革命を背景として、ここでの薔薇は単に純粋な恋愛を求めているのではなく、未だ病身として登場しながらも、社会と闘争する女性革命家の姿として描かれる⁽³⁵⁾。そ

れに対して、一年後パリで恋人と出会う約束という「はかないのぞみ」だけを頼りに思っている龍子はただ単純にロマンチックな「恋愛」関係を追求しており、再び薔薇と照らし合わせて自分の不甲斐なさが感じられるという自画像が描出されている。

この部分で、龍子は薔薇の恋愛関係に注目している。

「楊さんはあなたの恋人、でしょう？」

(中略)

「わかりません。でも、楊さんと握手をするとき、知らず知らずのあいだに、二人の握っている手が固くなります。」と、切れがちな低い声で言ったその言葉は、軽薄にひびかないで、しんみりときこえた。まじりけのない愛情のためだろうと、龍子は思った。(中略)多くの出来心の愛欲の生活から、そればかりは真実のものとして、まぎらせまいとしているらしい薔薇の切ない心情をおしはかると、龍子は哀しくなってきた。龍子が感じとった行末のおぼつかなさを、薔薇自身も十分おそれているにちがいがなかった。その気持ちが、薔薇の身边にたゞよう憂愁となって胸を打ってくるのだった。恋人があんまり若すぎるのだった。一でも、朱薔薇さんはそんなこと、てんで気にもかけていないかもしれない。そう思ふと、彼女の心を嫉ましが通りすぎた。(p.92-93)

薔薇の話聞いて、龍子は薔薇と楊の恋愛の純粹さを羨望すると同時に、その恋にはかなさも感じる。不安定な、はかない恋を「目当て」にするという点で龍子は薔薇に共感するが、その不安定さに怯えない薔薇の態度は、龍子に嫉妬の気持ちを生じさせる。

他者像から自画像へという連動が続くこの部分において、再び強い薔薇像が立ち上げられ不甲斐ない自分という自画像が作り出されているということが出来るだろう。また、龍子の嫉妬には、彼女と薔薇の間の亀裂が示されているとも考えられる。しかし、そのような緊張感はあるものの、女性同士間の相互理解と共感が同時に立ち上げられてもいる。つまり、亀裂と共感が同時に描かれているといえるだろう。そのような女性作家の書く行為の複雑さがここに示されている。

以上、龍子の視線に移すと、朱薔薇との交渉を通して、次の二点が分かる。まず、龍子の目で見えた薔薇像の造形は、郭(男性)の視線で見た病態な薔薇像とだいぶ違い、力強く偉大な女性像として裏返しにして立ち上げられている。それは矮小化された不甲斐ない龍子像の造形とは対照的である。そこでは他者との関わりを通して自己認識を生成するような自画像と他者像の連動のメカニズムが構築されている。森三千代と同時代の男性作家といえば、たとえば谷崎潤一郎、前田河広一郎、森の同伴者である金子光晴らの名前が思い出されるが、彼らの中国人作家との交流についての記録では、中国文士と交歓した様子が描写され、中国人文士の思想、流派についての紹介などはあるものの⁽³⁶⁾、森三千代の作品に示された他者像を通して自己像が生成するという連動のメカニズムはほとんど見られない。次に、この小説の中で、日本の中国への侵略が拡大しつつあった時期を舞台としているが、龍子の視線に、宗主国側による半植民地の中国に対する支配的な視線が見られず、逆に、中国人女性に対する敬意が造形されていることは、当時の植民地主義に対する批判として読むことも可能ではないか。また、薔薇に対して嫉妬のような亀裂がある一方で、理解と共感が示されており国家の枠組みに回収されない

女性同士の繋がり の発生が見出される。

四、日中女性同士 — 連帯の可能性へ

さらに、第三回の対面について考察したい。この場面で、まず留意しなければならないのは、男たちの姿が完全に消えてしまっていることである。しかも、龍子の前に現れた朱薔薇はもう郭の視線で見られた時のような病態の女性ではない。病に侵された薔薇像から「すっかり元気になっていた」という薔薇像⁽³⁷⁾へと転換され、郭の視線で見た薔薇像は完全に上書きされていると言える。さらに、第三回の対面では、もう一人の女性、薔薇の妹の范美が登場する。ここでは、范美の目から見た龍子像と、龍子の目から見た范美像を分析していく。

今回の対面では、薔薇と范美が龍子を食事会に誘うために彼女の家に来た。

「妹、昨日杭州から出てきました。桂さんの話をしたら、びっくりしました。どうしても会いたいというから、私、連れてきました。」

(中略)

「忘れる方がむずかしいわ。学校であれほど有名だった桂さん。」「先生とけんかをしたり、寄宿舎を抜けて泊まって来るので有名な、そうでしたわねえ。」「えゝゝゝ。そうそう、そんな話をしたいので来ました。忙しくて御迷惑ですか。私達と一緒に来ていたゞけますか」

(pp.93-94)

范美の記憶における学生時代の龍子は「先生とけんかをしたり、寄宿舎を抜けて」外で泊まったりした、近代日本の女学校の規範を逸脱した特殊な女学生であった。学校でも有名人だったという。范美にとって、龍子は忘れがたい人であり、「どうしても会いたい」人である。范美の視線から見た龍子は強く自立したイメージとして記憶されている。さらに言えば、学生時代の范美は龍子に共感する同じ戦線に立つ仲間であった。以上のように、范美の視点を通してもう一つの龍子像が現れている。それは今まで龍子が作った不甲斐ない自画像を超え、肯定的に捉えられたものである。范美の視線によって、龍子はもう一度自画像を再構成してゆく。それはネガティブな自画像をポジティブな方向へ転換させるものであった。それでは、龍子の目に見る范美像はどうであろうか。また范美像は龍子の自画像とどのような関係にあるか。

「夫とは別れました。どこにいるかも知りません。私の方から別れて、出てもらいました。」

(中略)

范美は日本の女高師を卒業して、本国へかえってからずっと、女子育英の仕事にたずさわり、杭州で女学校の校長をして今日に至った。日本の学校で学んだ精神とは似もつかない自由解放の精神で、因習の根強い中国の旧社会の少女たちを教育する仕事であった。盃が二まはり三まはりして、国境を越えた友情がたのしくほころんでいった。(p.94)

日本の女子教育を受けた中国女性知識人である范美は帰国した後、みずから離婚に踏み切った、「良妻賢母」というジェンダー規範を逸脱した女性像⁽³⁸⁾として描かれる。龍子に焦点化した語りにおける范美の「自由解放の精神」は、近代日本女子教育における女性のジェンダー規

範と相反したものとして、ポジティブな意味が付与されている。このような、互いの評価を通して、龍子と范美は同じく「自由解放」の精神の持ち主として描かれている。

日本の女学校で「学んだ精神」を批判的に捉え、「自由解放」の生き方を積極的に肯定するという側面は、モデルとなった白薇の認識としても確認できる。1932年1月、白薇は中国の『文学月報』の創刊号において、自分の東京女子高等師範学校での経歴を次のように述べた。

私は日本で9年間を無為に過ごした。東京女子高等師範理科に入学し、その後歴史教育科で勉強していて、また心理学を専門にしたこともあった。しかし、私は女子高等師範に対して憎悪の念を抱いた。あそこは活発な若い女性を古い機械、従順な奴隷にならしめる場所だった⁽³⁹⁾。

「病薔薇」にも、こうした白薇の認識が取り込まれた可能性もあるかもしれない⁽⁴⁰⁾。この第三回の対面の場面は、男性が排除された時間と空間になっており、日中の女性知識人たちが互いに向かい合って、緊張感なく言葉を交わす姿が見られる。第一の対面を振り返れば、女性たちの間には郭という男性の視線が介入していた。また第一回と第二回の対面で語られた龍子の視点による薔薇像では、有名な女性作家および革命家という薔薇に対して、龍子是不甲斐ない自己認識を示しており、一種の緊張感が女性と女性の間でも存在しているといえる。しかし、第三の対面では、そのような緊張感が発生するのではなく、范美の目を通して、不甲斐ない自画像が読み替えられ、連帯感が生み出されている。このような連帯は時間と空間を超え、深い意味を持つ。当時の時代背景にもう一回触れて言えば、1928年5月の済南事件とその後の山東出兵が日中関係をさらに悪化させた重要な歴史背景として思い起こされる。龍子が上海に滞在している時期は、日中関係が悪化しつつある時期であった。しかし、この小説の中では「国境を越えた友情がたのしくほころんでいった」と書かれたように、日中両国の大きな差異を超え、同じく逸脱した女性の立場で、日中女性同士の繋がりを作り出された。女性たちの連帯は、次のように強調されている。

「范美さんは、それでは好きな人はいらっしやらないの。」「妹の気に入る人はいないんです。むずかしい人。」「姉さんは愛綱なんだから。」「妹は、姉の作品の表題を取ってひやかした。」「桂さん、この姉はね。病薔薇なんです。その病気は恋愛病。」「(p.94)

(中略)

「桂さんの恋人のために。」薔薇はそう言って、いったん伏せた盃を起こして幹杯した。幾十日の航海ののちに、幾千里の距離の彼方に、恋人を待ちのぞもうとする龍子を、姉妹たちは、ロマンチストだと言って批評した。中国人はリアリストだといわれているけれども、薔薇にしろ、范美にしろ、自分よりもっとロマンチストだといって、龍子はやりかえした。なぜならば、薔薇は、彼女自身の夢を追い求めるために病薔薇となるではないか、范美もまた、夢が大きすぎるために、誰一人気に入った相手に出会わないではないかと言った。(p.95)

范美は薔薇の作品の表題を取って、朱薔薇を「病薔薇」、その病気を「恋愛病」と「ひやかした」。ここで重要なのは、范美が冷やかした「病薔薇」の「病」は、郭の視線によってネガティ

ブに意味づけられた性病ではなく、「愛」という精神的な「病」としてポジティブに示されていることである。その「愛」は女性の自己実現、自己解放の「夢」に結びついており、大正時代の日本の「新しい女」たちの闘う精神に相通じている。龍子は、三回の交流の深まりを通して、自分に見いだせない「自由解放」の精神を薔薇に見出し、「病」の意味を読みかえた。学生時代の女性たちの闘う姿が薔薇の姿を通してもう一回龍子の前に現れたともいえるが、龍子にとって、それは必ずしも遅れたものではなく、自己反省とともに肯定的に捉えられたものとなっている。

このように自由解放の精神を見出した森三千代と対照的なのは、金子光晴である。少し長くなるが、金子の記述を引用する。

しかし、政治をやろうとか、芸術に献身しようとかいう若い娘は、こういう上海娘とは、同じ先端を切っていてもまったくゆき方がちがっている。

田舎の素封家の娘などが多くて、その旧物破壊思想にも相当、精神的犠牲の上に建てられた内容があつて、その点やぼくさくも見える。彼女たちはいつも、民国の将来という意識がはなれず、身をもって猪突してゆき悲壮な精神に心を燃やしているようである。青鞥社の出来たころの日本の空気とよく似ている。

娘たちは、勝手に “意中の情人” とフランス租界あたりの小さな部屋を借りて恋愛人生の自由を謳歌している。一、二のそういう若人たちを私も知っている。女が魯迅の弟子で、男が詩人という一對の侘び住居を私はおとずれたことがある。(中略)

インテリ支那人のうちには各地方の俊秀がいる。少なくともよそで見る支那人よりは、新鮮で潑刺とした気分をもっている。女たちにも知的な美しさがある。ひらめくものがある。(中略)

上海の新しい家庭では反動的なくらい、この古い習慣がさかさまになり、不必要な場所にまで妻君がのり出し、妻君を尊重することを列席一同に強請する傾向さえある。妻君はまた実に自由にふるまい、高談雄弁四筵を驚かすという風である⁽⁴¹⁾。

金子について検討した趙は金子光晴が「上海娘には好意的である」が、「上海の男女平等にはやはり閉口したようだ」と指摘している⁽⁴²⁾。だが、金子光晴の上海娘（たとえば、白薇）に対する視線もまた、肯定的とはいひ難い。金子は自由精神を持った当時の中国女性たちの思想を「やぼくさく見える」と指摘し、彼女たちを日本大正時代の青鞥社の「新しい女」と同等に見る。それは時代遅れのイメージといえる。また同時に自由解放の精神を持った中国女性たちを行き過ぎたフェミニズムとして認識している面もあり、このような金子の視線は郭の視線にも通じるものである。

金子と比較すると、この作品の中で、龍子の視線を通して、中国女性たちの姿が肯定的に見出されていることがより興味深く感じられる。とくに龍子に焦点化した語り手による日本女子教育の批判は、大正時代のフェミニズムが中国の当時において、日本の女子教育に閉じ込められることなく、大きく花開いたとも見えてくる。日本で挫折した大正時代のフェミニズムが中国で強い生命力を得たと捉えられているともいえるのではないか⁽⁴³⁾。龍子は「何かたのもしくもあった」、「心がほっと明るくなった」という気持ちを表現し、中国の女性たちに刺激され、励まされると同時に、彼女たちと緊密な、力強い連帯関係を結んでいる。

部屋いっぱい落日がさし込んで、金魚を入れた硝子鉢の水の反射が、聯や額で所狭い壁の一個所でゆれていた。象牙の箸も人の顔も、室内のものはみな陽に透けて、この世のものとは思われない清らかさにとけこんでいた、其中を三人のくゆらす煙草の煙がゆるやかに流れた。(p.95)

末尾における「清らかさ」という描写は最後の龍子の心象風景と呼応しているといえるだろう。この女性同士の愉快的食事会を通して、龍子の自己語りは変質し、前半に示された憂鬱や焦り及びその後の嫉妬が消え、自分自身を励ますような、勇気づけていくような明るい気分へと変化している。

以上、第三回場面を中心に、もう一人の他者范美の視線を通して、龍子像が新しく形成され、変質する様相を分析し、龍子と薔薇および范美の強い連帯の関係を確認した。この部分での他者像と自画像の連動の過程においては、最初の偉大な薔薇像（他者像）と不甲斐ない龍子像（自画像）という不對等の関係から、范美の登場とともに、薔薇像（他者像）と范美像（他者像）および龍子像（自画像）が対等の関係となった。ここまでの薔薇との付き合いで生じた緊張や亀裂は、自己と他者の境界を前景化したが、ここでは、三人が緊張感なく、強い連帯を結び、そのような境界線を解消していく様が描かれている。つまり、日中関係が緊張しつつあった1920年代後半という時代背景の中、森三千代は女性というカテゴリを介し、自己表象という書く行為によって、国家の枠組みを超える日中女性同士の連帯の構想を示しているのである。男性を消去し女性としての文脈で理念の模索がなされていると言えるだろう。

おわりに

本稿では、越境する女性作家である森三千代が、同じく作家であるエリート層の中国女性作家白薇との交渉を題材とした小説の中で、他者像を自己像の生成に連動させる過程を分析した。また、現実とフィクションの違いに注目し、日中女性作家の交流が作品の中でどのように虚構されたのかを分析することで、ジェンダーと国家の枠組みに関わる問題を見出し、文脈の多層性を明らかにした。

趙は森三千代の小説の中に現れた外国人の特徴を「どこの国の人も、根本的には自分たちと同じ「人間」であるという極めて自然な」、「日本人と同じ平面で描かれた等身大の外国人像」と位置づけ、とくに、朱薔薇という人物像を「三千代が実際に接していた人々をモデルにしたものであるだけに、リアリティーが増している」と評価した⁽⁴⁴⁾。しかし、本論で検証したように、「朱薔薇」という人物の造形はただ「リアリティーが増している」だけにとどまるものではない。微分化して捉えれば、薔薇との第一回の対面から第三回の対面まで、薔薇の人物像と龍子の人物像は変化している。そこには、他者像を自画像の生成に連動させた女性作家森三千代の自己表象という書く行為の複雑性が見られる。また、男性ジェンダー化された文学の場において女性作家を性的な文脈に封じ込める否定的な意味づけへの抵抗と、意味の置き換えを見出すことも出来るだろう。

龍子像の変化にともなって、日中の女性間の力関係についても変化が見られる。最初は龍子の不甲斐ない「自画像」が、強く解放的な中国人女性像との対照の中で造形されているが、范美が登場するとともに、薔薇や范美とお互いに理解しあい、共感し合う龍子像へと変化してい

く過程を無視することは出来ない。こうした点から見れば、「病薔薇」における中国人女性（薔薇姉妹）を単純に「等身大の外国人像」とすることはできない。また、龍子と薔薇姉妹の付き合いは「極めて自然」なものでもない。龍子は薔薇と付き合う際に、嫉妬のような亀裂を生じさせつつも、中国の女性の「自己解放」の精神に共鳴していく。その中で、中国の女性に自分が理想とする女性（作家）像を見出し、彼女たちへの憧憬を表現している。このような揺らぎは、森三千代が中国の女性作家と接した際に生じた複雑な体験と感情に関わっていると思われる。

森三千代はこの作品において、生涯病気に悩まされていた現実の白薔像を書き換えた。「病」の身体を「すっかり元気になった身体」に置き換え、「悪女」のラベルをリベラルな女性へと上書きすることで新たな「白薔像」を提出した。同時に森三千代は、中国の女性との出会いの中で、自己を問い直す日本人女性作家を描きだした。1920年代末における森三千代と白薔の出会いには二人の女性作家に貴重な交流のチャンスを与えたというだけでなく、森三千代に自分自身を再認識する機会を与えたと考えられる。森三千代は事後的にこの記憶を想起する際、「病薔薇」という自己表象の小説の創作を通して、男性ジェンダー化した文学場で女性作家に付された意味を、女性の文脈に取り戻そうとしている。小説のタイトルである「病薔薇」の「病」は、郭という男性の視線で見た「性病」という意味づけから三人の女性が共感した「自由」、「恋愛」、「夢」⁽⁴⁵⁾というポジティブな意味へと転換されたのである。また、1920年代後半の上海を舞台に描かれた、宗主国側の女性（森）と半植民地の女性（白）の出会いは、この小説の中で、連帯に向かう関係性を示している。日本女性の中に発生した中国女性への憧憬や敬服は、近代化における宗主国側のヘゲモニーと植民地の服従という関係に対する抵抗とも読め、より複雑な様相を想起させるものである⁽⁴⁶⁾。

注

(1) 1920年代の上海における日中知識人の交流に触れた、近年の研究として、『女性記者・竹中繁のつないだ近代中国と日本 ― 一九二六～二七年の中国旅行日記を中心に』（山崎真紀子・石川照子・須藤瑞代・藤井敦子・姚毅著、研文出版、2018）、『昭和文学の上海体験』（大橋毅彦、勉誠出版、2017）、『上海日本人社会とメディア 1870-1945』（和田博文・徐静波・西村将洋・宮内淳子・和田桂子著、岩波書店、2014）、『上海一〇〇年 ― 日中文化交流の場所』^{トボス}（鈴木貞美、李征編、勉誠出版、2013）、『一九二〇年代東アジアの文化交流 I、II』（川本皓嗣、上垣外憲一編、思文閣出版、2010 ― 2011）などがあげられる。管見では、これらの先行論において、女性作家たちの交流について言及されたのは趙怡論（「一九二〇年代の上海における日中文化人の交流 ― 金子光晴・森三千代の場合を中心に ―」、『一九二〇年代東アジアの文化交流』、2010、pp.3-42）のみである。

(2) 森三千代は1920年代の後半から1950年代まで、彼女の海外（中国、東南アジア、ヨーロッパ）旅行を題材とした作品を次々と創作した。そのうち、多くの小説の創作は1940年以降に集中している。これらの具体的な作品名と発表時期については、趙怡「森三千代 ― 越境する女性作家 ―」（『旅の文化研究所研究報告』（第21号）、2011.12、pp.59-77）のまとめを参照されたい。

(3) 趙怡は「森三千代の「髑髏杯」から金子光晴の「どくろ杯」へ ― 森三千代の上海関連小説について」（『駿河台大学論叢』（第36号）、2008.7、p.3）において、「春灯」、「女の火」、「火あそび」、「髑髏杯」、「根なし草」を「完全な創作として見るべき作品」と位置づけ、「春灯」以

下の五篇を「春灯」シリーズと称した。

(4) 趙怡「森三千代の「鬪牒杯」から金子光晴の「どくろ杯」へ — 森三千代の上海関連小説について」『駿河台大学論叢』(第36号)、2008.7、pp.1-27。

(5) 宮内淳子「森三千代の上海 — 描かれた装いの意味」『アジア遊学 — 戦間期東アジアの日本語文学 特集』(第167号)、勉誠出版、2013.8、pp.138-149。

(6) 白薇(1893 — 1987): 本名黄彰、黄白薇とも呼ばれる。中国近現代の女性劇作家。中国封建家父長制に抵抗し、自由解放の精神を持った女性である。十六歳、父に決められた婚姻を結ぶが、その後姑の虐待に耐えられず逃げだして女子師範学校に入学。学校で、英米教会の反対のため、除名され転校。1918年、父がもう一度彼女を姑の家に連れ戻そうとしたことをきっかけに、日本へ逃亡。1923年東京女子高等師範学校に入学。一九二四年中国人の詩人楊騷と知り合い、情熱的な手紙で交流を続けた。1926年の冬に帰国した後、大革命に参加した。1927年9月、上海に移住し、文学創作に専念。1928年「琳麗」、「幽霊の塔を打ち壊して」などの戯曲作品によって、文壇で有名になった。1930年に中国左翼作家連盟に参加。1970年代まで多くの作品を創作した。

(7) 『桃源』(1946.10 — 1949.6?): 中国人である韓吉昌によって創刊された中日文化雑誌(刊期不定、第三卷不明)。創刊当初、中日両国の相互理解を深め合うこと、東洋平和、世界平和のためという意図を打ち出した。最初は日中の文学、文化についての研究が両方掲載されたが、後期になると、中国文化、文芸に関する研究、評論、紹介文などが雑誌の大幅な誌面を占め、中国関係の専門誌という傾向に変化した。中国文学者の奥野信太郎、岡本隆三、東洋史学者の石田幹之助、小説家の武田泰淳などが常連の投稿者であり、美術評論家、森三千代の過去の恋人である土方定一も創刊号の投稿者の一人であった。森三千代は武田泰淳や土方定一との個人的な関係によって、この雑誌に投稿した可能性がある。一方、掲載された内容から見ると、読者層は中国文化に関心を持つインテリたちであったと思われる。

(8) この資料は森三千代の『東方の詩』(圖書研究社、1934)の「後記」である。

(9) 趙怡「森三千代の上海: 金子光晴と放浪の旅へ」『駿河台大学論叢』(第34号)、2007.7、pp.32-34。

(10) 趙怡「森三千代の「鬪牒杯」から金子光晴の「どくろ杯」へ: 森三千代の上海関連小説について」、『駿河台大学論叢』(第36号)、2008.7、p.4。

(11) 例えば、当時金子光晴と森三千代は一緒に白薇を訪問したにもかかわらず、小説の中で、金子の姿が完全に消えてしまったという点について、趙はすでに言及している。

(12) 日比嘉高は、「作家が自分自身を登場人物として造形した小説」を「自己表象テキスト」と定義した。(日比嘉高、『<自己表象>の文学史 自分を書く小説の登場』翰林書房、2002、p.10)

(13) 1927年、金子が上海に行っている間に、森三千代が当時の東京帝国大学美学美術史専攻の学生土方定一と恋に落ちた事件。

(14) 森三千代と白薇が出会ったことについて、森三千代の『東方の詩』(圖書研究社、1934、pp. 83-84)、金子光晴の『どくろ杯』(中公文庫、1976、p.214)、『三界交友録』(新評社、1976、pp.172-183)の中に記録があった。

(15) この事件が新聞、芝居、映画界で話題になったことについての記録は森三千代の「アジアの女」(『朝日新聞』、1930年11月8日、11月10日 — 11月13日連載)、金子光晴の『どくろ杯』(中公文庫、1976、p.132)、『三界交友録』(新評社、1976、p.180)の中にも見られる。

(16) 沈宗洲、傅勤『上海旧事』、学苑出版社、2000、pp.105-126を参照。

(17) 中国の近代女性作家たちが歴史の舞台に登場し始めたのは、1915年以降の文学革命の時期である。1919年の五・四運動の後、文壇で活躍し、「新文学」を創作する第一世代の女性作家たちとして、謝冰心、陳衡哲、廬隱、馮沅君、凌叔華などがいる。彼女たちより作家としての白薇の登場は少し遅れていた。

(18) 西澄「閑話」『現代評論』第3巻72号、1926年4月24日、p.391。

(19) 張若谷「中国近代の女性作家」『真美善(女性作家特集)』、1929年1月、p.71。(中国語

の原題目は<中国現代的女作家>であり、日本語訳は筆者による。)

(20) 趙怡はその名前を「郭沫若、魯迅(本名周樹人)、郁達夫三人を合体して作られた」と推測した。(趙怡「森三千代の上海:金子光晴と放浪の旅へ」『駿河台大学論叢』(第34号)、2007.7、p.49、注26。)

(21) 森三千代「後記」『東方の詩』、圖書研究社、1934、p.83-84。

(22) スーザン・ソントグ、富山太佳夫訳『隠喩としての病い — エイズとその隠喩』、みすず書房、1992、pp.89-167。

(23) 小倉孝誠『身体の文化史 — 病・官能・感覚』、中央公論新社、2006、pp.159-213。

(24) 「白薇はまだ楊騷と同居中」『社会新聞』第7巻9号、1934年4月27日、p.135。(原題目は<白薇仍与楊騷同居>であり、日本語訳は筆者による。)

(25) 「文壇上の二人:楊騷と白薇、また愛情の決裂へ」『文芸週報』第1巻25号、1935年12月21日、p.609。(原題目は<文壇上的一对冤家楊騷白薇又宣告破裂>であり、日本語訳は筆者による。)

(26) 「夫婦作家の謎 — 楊騷と白薇の離合」、『文芸新聞』、1931年3月30日、p.3。(原題目は<夫婦作家の謎 — 楊騷と白薇之離合>であり、日本語訳は筆者による。)

(27) 同注24。

(28) 同注25。

(29) 奥野信太郎「若き支那女性の苦悩 — 冰心型と白薇型」『新女苑』第3巻第7号、実業之日本社、1939年7月、p.224。

(30) David Der-wei Wang, *The Monster That Is History: History, Violence, and Fictional Writing in Twentieth-Century China*, University of California Press, 2004, p.112.

(31) 森三千代「青春の放浪」『森三千代鈔』、濤書房、1977、p.283(初出:『新潮』48巻11-12号、1951年10-11月)。

(32) 『ムキシュキン公爵と雀』は森三千代第二次上海滞在時期(1929.1)に金子光晴の友達である島津四十起の斡旋によって出版された。印刷は芦澤印刷所であり、発行所は「森三千代 上海北四川路余慶坊一二三号」である。その住所は当時三千代が上海に滞在していた時期の住所だった。非売品であり、流通はしていないと思われる。

(33) 飯田祐子『彼女たちの文学 — 語りにくさと読まれること』、名古屋大学出版会、2016、pp.30-46。

(34) 徐中約著、計秋楓、朱慶葆訳『中国近現代史(下)』、中文大学出版社、2001、pp.526-533を参照。この国民大革命は、中国当時の各地域の軍閥とその背後で支えたそれぞれの帝国主義者たちを打倒することを目標として、中国国民党と共産党合作の形で推し進めていた。白薇が1926年の年末に帰国した理由の一つはここにある。当時、彼女はこの国民革命運動に参加することを強く望んでいた。しかし、国民党と共産党の矛盾が顕在化し、1927年4月12日に起こした上海クーデターきっかけに、国共合作が崩壊してしまった。国共合作が失敗した後、彼女は上海へ移住し、文学作品の創作に専念した。

(35) 興味深いのは、モデルである白薇が1926年年末から1927年9月までの間に、広東、武漢などの都市で大革命の波に乗って闘争した時、恋人の楊騷は彼女のそばにいなかったことである。

(36) たとえば、谷崎潤一郎の「上海見聞録」(『文芸春秋』第4巻5号、1926.5)「上海交遊記」(『女性』第9巻5号、1926.5)、前田広一郎の『悪漢と風景』(改造社、1929)、金子光晴の「上海より」(『日本詩人』6巻6号、1926.6)、『どくろ杯』(中公文庫、1976)など。

(37) 白薇は1935年に淋病を治療するために手術を受けたが、全快できなかった。また、性病だけではなく、ほかの多くの病気にかかった白薇は、生涯病気に悩まされた。

(38) このような女性人物は、他の作品においても登場している。たとえば、「女の火」(『世界文化』第3巻2号、1948年3月)の中の友子や「火あそび」(『東北文学』第4巻3号、1949年3月)の中の朋子などの主人公などは、夫との夫婦の生活に不満があり、みずから夫を離れ去っていく女性像として造形され、同じく自己語りの小説である「青春の放浪」(『新潮』第48巻11-12号、1951年10月-11月)においても、みずから夫と離婚しようとする決意を持った「私」が描かれた。

(39) 白薇「私の成長と遍歴」『文学月報』第1巻1号、1932年1月、p.178。(原中国語の題目は<我的生长和发落>であり、日本語訳は筆者による。)

(40) この部分における龍子の考えを当時、白薇から聞いた可能性もあるか。

(41) 金子光晴、「アジア放浪記 — 自由花」、『金子光晴全集 第十一巻』、中央公論者、1976年、pp.60-61。(1934年頃執筆)

(42) 趙怡、「夫が描いた中国人女性、妻が愛した中国人男性 — 金子光晴と森三千代」、『比較文学研究』(第91号)、東大比較文学会、2008.6、p.103。

(43) ここには、西洋思想、文化の流通や階級の問題など、複雑な背景も存在する。新しい女/モダンガール像の共通性を1920年代から30年代の東アジアにおける消費文化の枠組みの中で検討した研究として、『モダンガールと植民地的近代—東アジアにおける帝国・資本・ジェンダー』(伊藤るり等編、2010)がある。本論で論じたのは表象された女性像の問題ではなく、書く女性、表象する女性の自己像がどう語られたかについての問題である。

(44) 趙怡「森三千代 — 越境する女性作家—」『旅の文化研究所研究報告』(第21号)、2011.12、p.71。

(45) ここで、タイトル「病薔薇」の「病」は、すでに薔薇の身体の「病」という意味から、三人の女性が共感した「自由」、「恋愛」、「夢」のために悩んでいる「病」へと質的に変化した。それは当時のリベラルな日中女性知識人たちの自由恋愛、自己実現を求める精神と繋がっている。

(46) 森三千代がこの作品をいつ執筆したか、現時点ではまだ不明であるが、戦後まもない1946年10月を発表したということについては、当時の中国観を踏まえた考察が必要であろう。

馬場公彦によれば、敗戦まもなく、アメリカの占領下におかれた日本では、雑誌創刊ラッシュ(1945-1946)のブームに乗って、民主革命や戦後改革などをめぐる論題が数多く俎上に上げられ、その中で中国に対する世論も左派に傾いたものが圧倒的に多いという(『戦後日本人の中国像 — 日本敗戦から文化大革命・日中復交まで』、新曜社、2010、pp.61-72)。「病薔薇」に描かれた中国の女性に向けられた日本女性の憧れは、同時代の日本論壇から中国を眺めるその視線にもつながるものである。この点については今後の研究課題として検討したい。

【付記】本研究はJSPS科研費18J13050の助成による研究成果の一部である。本論文における「病薔薇」本文の引用は、雑誌『桃源(創刊号)』(吉昌社、1946年10月)による。引用に際し旧体字、旧仮名を適宜現行のものに改め、傍点、ルビなどを省略し、頁数のみを示した。また、本論文の引用における下線は筆者による。

